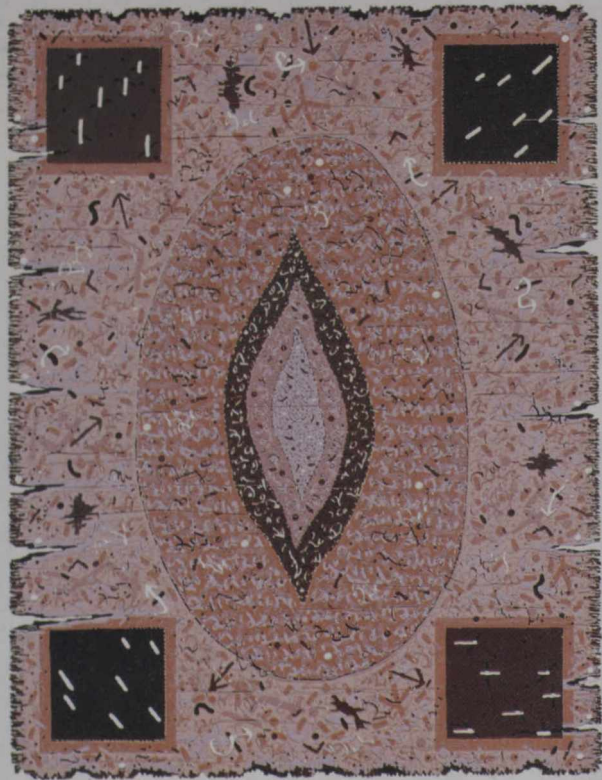


品を印刷、出版、配布する団体であった。ラ・ギルド・グラフィックは最初の十一年間に、五十五人以上の版画家による一千点以上の出版を成し遂げた。

一九六六年、モントリオールにも一つのアトリエ・ワークショップが、ピエール・アイヨットの手で誕生、「グラフ」と名づけられた。七人の美術家で構成する委員会が新しいメンバーの適格審査に当たったが、選ばれたメンバーは、古ビルを改装したこのワークショップの家庭的雰囲気浸りつつ毎日制作に没頭できる。

一つあることに気付く。ポール・リュシエが経営する「アラシエル」で、一九七四年に出来た。一方、「アトリエ・ド・レアリザシオン・グラフィック」が、一九七二年ケベック・シテイで発足した。

現代版画センターが、モントリオールなどに設立され、今では各地に多数存在している。一九六八年にビル・ロブチャクが、ウイニペッグに「グランド・ウエスタン・カナディアン・スクリーン・ショップ」を開き、やがて専門家で写真家であるレン・アントニーが加わった。かつて営利的手法の烙印が押されていたシルクスクリーンは、美術家の意図を忠実に反映させた作品を作ろうとする努力が



ピエール-レオン・シェトロ「écriture d'origine pour rituel cosmique」(木版, 1980年)



ガストン・ブチ「FIGUREMENT」(リトグラフ, 1977年)

認められ、烙印も消された。一九七二年以来営利的な仕事はすべて中止、美術家による版画の限定版刊行に専念している。異なったメディアを組み合わせた制作実験のため、ワークショップの設備拡張を計画、またデーヴィッド・ウムホルツが、「マグニフィシャント・ムースヘッド・プレス」という、注文による石版印刷専門のワークショップを同じビルの地階に準備中と聞く。

版画のワークショップは、版画を刷る目的のためにのみ存在するわけではない。とくにウイニペッグのワークショップは、集会の場所であり、美術に関連した他の活動の出発点であり、また技術的アイデ

イアだけでなく政治的、社会学的アイディアの交差点であった。一般にC・A・Rと呼ばれるカナディアン・アーティスト・レプリゼンテーション運動の第一回会合がここで開かれて以来、このワークショップは、支持、権利、理解を呼びかけるアーティスト兼運動家の温床となっている大変有力な運動である。

もしワークショップが版画の活力を試すリトマス試験紙の役割を持つとすれば、カナダ随所にワークショップが出来たことは版画の健在を意味する。版画ワークショップやアトリエは、カナダにおける版画の発展のために大きな役割を果たしたが、プリント制作に適した